



百済王物語

1 .



2 .



3 .



4 .



5 .



6 .



7 .



8 .



1 . は比木神社入口。木城町にある。2 . は比木神社本殿。
小丸川沿いに行くと大きな鳥居があるのですぐ分かる。
高鍋駅から車で約15分くらいなので、隣町だがそんなに遠くはない。
3 . は福智王の御墓入口。神社を出てすぐを左に歩くと、
この案内石碑があるのでとても分かりやすい。歩いて1分のところ。
4 . は福智王の五輪塔。神秘的な独特の雰囲気がある。

5 . は大年神社入口で、6 . が境内前。こちらはもちろん高鍋町にある。
木城町比木の方々は“おおどっさん（おおどしんじゃのおおどしさん）”と呼んでおり、
比木神社との関わりが強いことを確認できる。
国道沿いで持田簡易郵便局のある真米交差点から海方面へ向かう。
JRの踏切前に鳥居があるので、そこまで案内板もないが踏切が見えるまで進む。
7 . はその道の途中にある。之岐野妃の御墓入口。
8 . はその中にある之岐野妃の五輪塔だが、
福智王の五輪塔よりやや小さめなだけで形状は全く同じである。
ちょっと入るのに勇気がいるくらいの雰囲気だが、
いろいろと祀られているため、見ておく価値は高い。

比木神社周辺は、小丸川は澄み、神社も巨木があつたりと、落ち着ける良い環境にある。
また大年神社はすぐ横の線路の向こう、広い土地の向こうに海が見え、
車通りも少ないため波の音のはっきりと聞こえる。穏やかな風景だ。

今日あちこちに記されている百済王説話の出典は、
比木神社に保管されていた、「此木大明神本縁起」（現：神門神社）によるものが殆どです。
百済脱出から日向漂着、比木、神門への定住、追討、滅亡にいたるまで、克明に記されています。
しかしこの縁起は宝暦五年（1755年）に記されており、時代があまりに下がっています。
これに対し、近年神門神社に保存されていた百済王国の系譜をたどる「綾布墨書」が解読され、
説話が忠実として色彩を帯びるに至りました。この墨書は百済王の正当な系譜を明らかにしており、
禰嘉王は百済王最後の王である義慈王から四代目の王であり、
福智王は五代目の王に当たることが分かります。

百済滅亡で大和王朝に救いを求めた百済王族は、追討軍に追われ巖島から海路にて
日向に向かっていました。その途中嵐に遭遇し、蚊口浦の海岸に漂着しました。
およそ九世紀半ばのことではないかと考えられています。福智王は珠を占い住所を此木と定め、
追討の目をそらすため母妃を海岸に残したまま此木に向かいました。
しかしそんな一族に、安穏な日々は長く続きませんでした。
日向の金ヶ浜へ漂着し、南郷の神門に居を求めた父王禰嘉のもとに追討軍が押し寄せてきたのです。
福智王は小丸川上流沿いに中之又や渡川を越えて南郷へ赴き、
父王とともに最後の決戦に挑みました。追討軍は撃退しましたが、禰嘉王は討ち死に、
すでに王位を継承していた福智王も手傷を負い、命も尽きてしまいました。
弟葦智王も戦死し、之岐野妃も今はこれまでと自ら命を絶ち、陪臣女官らも殉死していきました。
かくして日向海岸に漂着した百済王族はことごとく相い果てたのです。
この凄惨な事実は地元農民に大きな衝撃を与えたと推測できます。
王族と接した人々は嘆き悲しみ慰霊に心砕き、この悲話を後世に伝えようと腐心したのです。
大年神社の祭神は之岐野妃、比木神社の祭神は福智王、また南郷の神門神社の祭神は禰嘉王です。
伊佐賀神社の祭神は葦智王で、高鍋の宮田神社、毛比呂計神社の祭神はいずれも百済王一族です。
これらの祭神はスサノオノミコト、イナダヒメノミコトなどの
日本の祭神とともに合祀されています。また比木神社祭神福智王は大明神です。
高鍋の農民は王族を等しく神として崇めていました。
これは王族と地区住民との、心の繋がり深さに他なりません。

高鍋には漂着した福智王が裳裾を広げたというモヒログ、鞍を乾かしたというクラカケ、
難破船を沈めたというイシブネなど数多くの地名由来が伝えられています。
例年11月4日、比木神社から袋神を囲んだ一行が小丸川沿いの田んぼ道を歩き、
大年神社へ向かいます。延々千年余に渡り引き継がれている比木さんの「大年下り」は、
比木大明神である百済王福智が笠袋に身を留め、大年に祭られる母妃之岐野（しぎの）を尋ねる
神幸の道行きです。また戦後昭和三十年代まで、宮田川に沿って此木へ向かう袋神福智王の
「比木下り」と呼ばれる一行もありました。